



## 会長挨拶 会長 鈴木孝純君

先週の1月29日(木)、鶴岡青年会議所の新年祝賀会に出席しました。私自身、3年連続の出席ですが、地域の未来を想う情熱と仲間ともに成し遂げるその行動力には毎回感動を覚えます。そして、ややもすると、事業計画も毎年の踏襲に流れがちですが、新理事長の力強い宣言には、新たな挑戦が随所に表われ、会員一同が協力して地域を背負っていく頼もしさも感じられました。

さて、「センター試験」に代わって令和3年度より導入された「共通テスト」も今年1月17、18日で6回目を迎えました。過去の大学入学者選抜に関する共通試験には幾度かの変遷がありましたので、ここで戦後のその歴史を簡単に追ってみたいと思います。

(1)進学適性検査(昭和23年～昭和29年)  
志願者個々の「進学適性検査の得点(将来)」と「志望大学の学力検査(現在)」および「出身校の調査書内容(過去)」の3要素をもとに合格者を判定。

(2)能研テスト(昭和38年～昭和43年)  
能力開発研究所テストと言われ、国側は大学入学者の選抜と高校の進路指導に役立つ共通テストとして昭和42年実施を目指したが、大学側が活用について極めて消極的。

(3)共通第1次学力試験(昭和54年～平成元年)  
基礎的学習の達成度を共通尺度で評価する試験と位置づけ、国公立大学入学選抜の第1段階試験がこの「共通1次」。最初は5教科7科目の1000点満点でし

たが、受験生への負担軽減のために、後に5教科5科目の800点満点となる。

(4)センター試験(平成2年～令和2年)

大学間・学部間の序列化や偏差値偏重という受験競争の弊害などを是正し、私立大も含めた各大学が教科・科目等を自由に採用・選択利用できる「アラカルト方式」とする。

(5)共通テスト(令和3年～)

従来の知識偏重型から脱却して「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価することを主目的とし、文章や資料を読み解く問題を増加するなど、多角的な能力を問う。

近年、共通テストの解答にA I(人工知能)の挑戦が続いておりますが、今年の米オープンA Iの結果は、主要15科目のうち、9科目で満点を取ったとのことです。また、同社のA Iモデルは一昨年の正答率は66%、昨年は91%、そして今年は97%に上昇したとの驚くべき結果でした。ちなみに、今年の15科目の受験生平均は58%でした。

A Iが人間の知能を超えようとする現在、重要なことは、人間はA Iと競争するのではなく、A Iが持つ処理能力や創造性を活用して、人間の可能性や豊かさを広げていくことです。ただし、責任はあくまでも人間にあることを忘れてはならないと思います。



**ゲスト** カーサービス山形 工藤礼佳様



**幹事報告** 小野寺佳克君

**委員会報告** 栗田裕子君

鈴木孝純会長 本日は工藤さん誠にありがとうございます。同じ三川ということで誇りに思います。今後の活躍をご期待しております。

五十嵐浩君 鱈汁例会では利酒大会の商品として渡部さん芝田さんのご好意もあり鱈汁セットを頂戴しありがとうございました。先月旅行新聞社主催の「プロが選ぶ旅館100選」料理部門、また、観光新聞の「人気温泉旅館ホテル 250選並びに五つ星の宿」に入選しました。

渡部芳幸君 本日は工藤さんありがとうございました。先日の鱈汁例会での商品ありがとうございます。先日の鱈汁例会でご利用ありがとうございました。利酒大会では1回で1~3位まで決まったので皆さん舌もうでも上がったなと思い、来年はもっと難しくしようと思いました。

齋藤浩子君

